

【研究ノート】

牧之原市大ヶ谷横穴墓群出土金属製品について

大谷 宏治

要旨 牧之原市大ヶ谷横穴墓群は横穴墓が多い東遠江でも最も東側に位置する横穴墓群である。当横穴墓群は調査が行われ、豊富な遺物が出土しているものの、金属製品については一部の資料を除いて写真の提示に留まり、実測図が公表されていなかった。このことから重要資料であるにもかかわらず、研究に取り上げられることも少なく、また横穴墓の正当な評価にあたっても支障をきたしていることから、小論では大ヶ谷横穴墓群から出土した既報告資料を含めて金属製品を資料紹介するものである。

キーワード：横穴墓 金銅装十字文楕円形鏡板付轡 金銅装馬具 大刀 鉄鏃 鋳 U字形鉄先

1 はじめに

筆者らはこれまでに東海地方の馬具や装飾付大刀、静岡県内の鉄鏃などについて集成（註1）を行ってきた。その中で牧之原市（旧・榛原町）に所在する大ヶ谷横穴墓群出土の金属製品については、三累環頭大刀は実測図が公表されているものの、馬具や鉄鏃などは報告書（榛原町教委1990）では写真の掲載に留まっていた。このため馬具と装飾付大刀の集成当時（2005年）に榛原町郷土資料館（当時、現在閉館）が所蔵する遺物については実測し公表したものの、報告書に写真のみ掲載された金属製品については実測を行うことができず、写真トレースを掲載するにとどまった。しかし、横穴墓の評価を行う際には非常に重要な遺物群であること、写真のトレースでは詳細な分析を行う上では情報不足の感が否めないこと、当時報告した馬具の掲載縮尺が小さく材質などは報告していないことを踏まえて、小論では大ヶ谷横穴墓群出土の金属製品について実測図を示して資料の紹介を行い、今後の遺物の検討や横穴墓群の性格などの検討に向けた基礎資料としたい。

なお、紙幅の関係で、今回は資料紹介に留め、遺物の評価や横穴墓群の評価については稿を改めて行いたい。

2 大ヶ谷横穴墓群の概要

大ヶ谷横穴墓群は、牧之原市（旧・榛原町）勝間字大ヶ谷に位置する横穴墓群（図

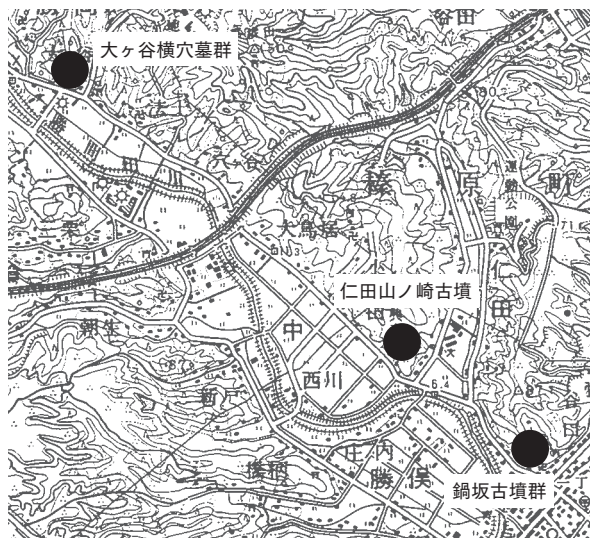
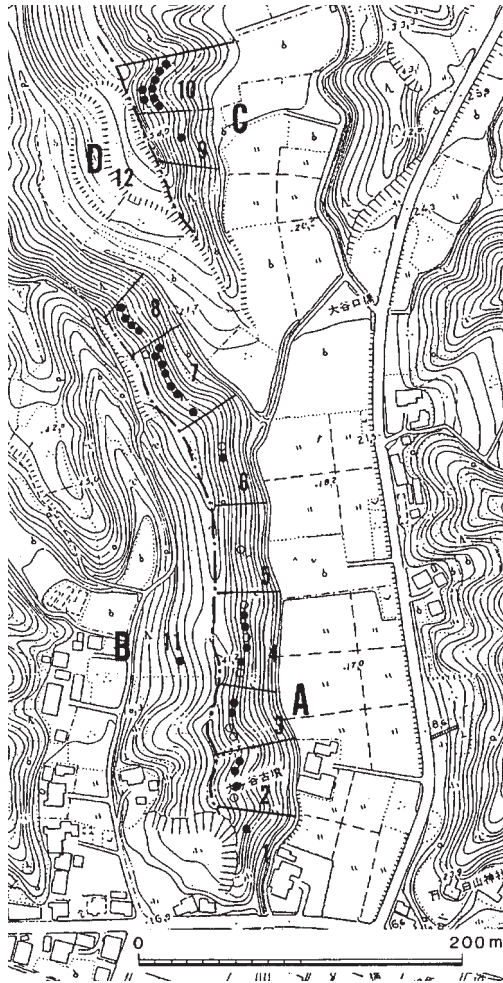


図1 大ヶ谷横穴墓群と主な周辺の古墳の位置

表1 大ヶ谷横穴墓群の群構成と横穴墓数

横穴墓支群番号		基数	横穴墓番号
榛原高校	榛原町教委1990		榛原町教委1990
—	1小支群	1	①-1 (1-1)
I支群	2小支群	4	②-1 ~ 4 (2-1 ~ 4)
II支群	3小支群	4	③-1 ~ 4 (3-1 ~ 4)
II支群	4小支群	7	④-1 ~ 7 (4-1 ~ 7)
—	5小支群	?	横穴墓の所在の可能性
II支群	6小支群	2	⑥-1・2 (6-1・2)
II支群	7小支群	8	⑦-1 ~ 8 (7-1 ~ 8)
II支群	8小支群	4	⑧-1 ~ 4 (8-1 ~ 4)
—	9小支群	1	横穴墓ではない可能性あり
II支群	10小支群	8	⑩-1 ~ 8 (10-1 ~ 8)
—	B支群	1	⑪-1 (11-1)
—	D支群	?	横穴墓所在の可能性
合 計	4支群12小支群	40	基以上

※榛原町教委1990をもとに作成。



A～Dの4支群、12小支群40基が確認されている。

図2 大ヶ谷横穴墓群の横穴墓の分布
(1:6,000, 榛原町教委1990より引用)

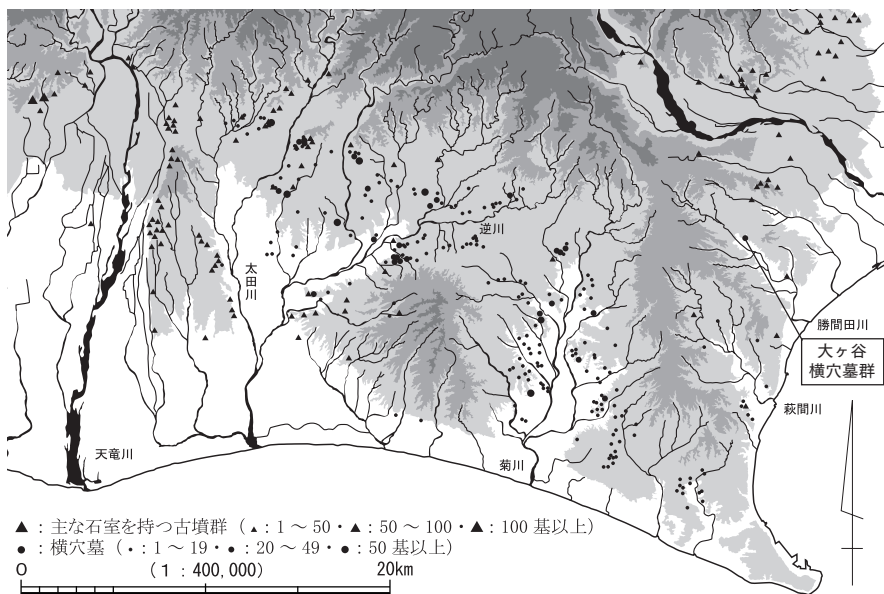


図3 遠江における横穴墓群と主な古墳群の位置 (大谷2011-図13を一部改変)

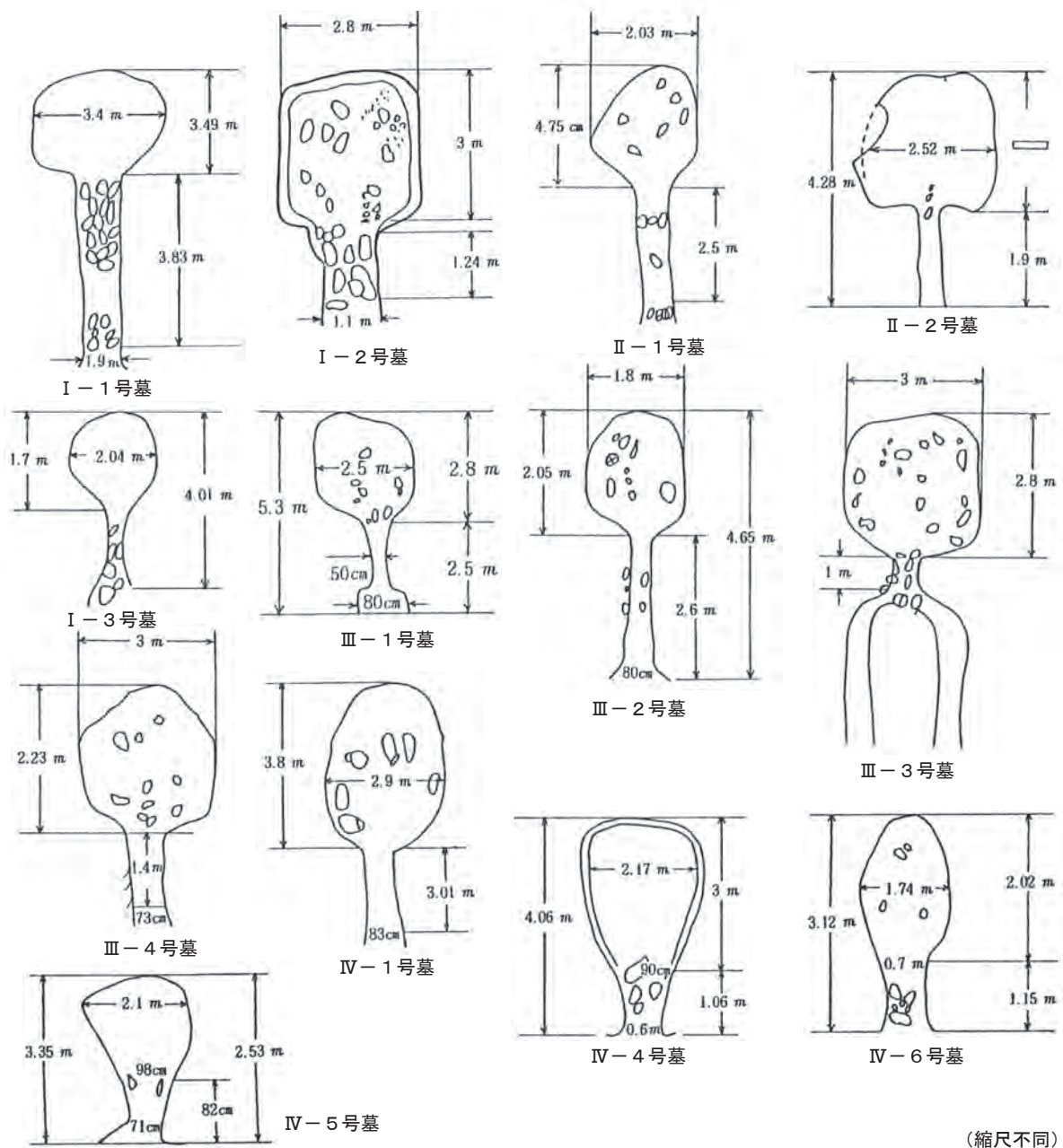
1)で、勝間田川の左(東)岸、牧之原台地から南側に向かって延びる尾根の東側斜面に多くの横穴墓が開削されている(図2)。横穴墓の築造数が2400基以上(静岡県考古学会2001)と全国的にみても非常に多い太田川～勝間田川流域の東遠江の中でも最も東に位置する横穴墓で群ある。また、当横穴墓群から3～4 km南側の、勝間田川の左岸には金銅装馬具や装飾付大刀が出土した仁田山ノ崎古墳や鍋坂3号墳などが位置しており(図1)、全国的に見ても横穴墓と古墳との差異について分析するには非常に重要な地域である。

大ヶ谷横穴墓は、昭和32・33(1957・58)年に飯塚悟朗氏、久永春男氏の指導により榛原高校地歴クラブにより実測調査(昭和32年)、発掘調査(昭和33年)が実施され、昭和62(1987)年～平成元(1989)年に静岡県教育委員会・榛原町教育委員会による詳細分布調査が実施されている(榛原町教委1990)。榛原高校の調査では38基が確認され、10基程度が調査された(榛原町1985)。横穴墓の形状について、天井形態はドーム形で、平面形は隅丸方形、やや不整形な楕円形であること、閉塞方法は河原石積みによる円礫積み閉塞であるが判明している。また、出土遺物が豊富であり、装飾付大刀や金銅装馬具のほか、U字形鉄先、須恵器などが出土したことが報告されている。

静岡県教育委員会と榛原町教育委員会の詳細分布調査時には4支群12小支群約40基の横穴墓が確認されている(榛原町教委1990, 註2, 図2)。この調査は、詳細分布調査によって行われたもので、主に横穴墓の基数の確認といくつかの横穴墓についてトレンチ調査が

行われ、横穴墓の平面形状や閉塞方法などが明らかにされている。この調査によって横穴墓の閉塞方法は河原石を積み上げる円礫積み閉塞であることが追認されている。

また、足立順司氏が城飼郡や榛原郡の古墳時代後期～奈良時代の分析を行うに当たり、本横穴墓群出土の馬具と「鉾」(註3)を図化し報告している(足立2011)。



3 出土遺物の概要

表2に示したように、金属製品は複数の古墳から出土しているが、榛原高校の発掘調査後静岡県教育委員会と榛原町教育委員会の詳細分布調査までの間に、各横穴墓群出土遺物が混在してしまい、三累環頭大刀や鍬先、矛石突などの特徴的な遺物を除いて、大刀や刀子・鉄鏃などは出土横穴墓を特定できない。

また、現状ではⅢ-1号墓から出土した「鏝」とされる遺物については今回の報告する遺物の中には確認できない。報告当時、鉄鏃や刀子を誤認したか、あるいは該当する遺物が既に失われた可能性がある。

なお、遺物紹介にあたり、小論では三累環頭大刀な

どが榛原高校調査時の横穴墓名で報告・研究されていることを考慮し、榛原高校調査時の横穴墓番号で報告する（註4）。静岡県教育委員会と榛原町教育委員会の詳細分布調査時に付加された横穴墓番号（榛原町教委1990）については、表1・2に榛原高校調査の横穴墓番号との対応関係を示したので、それを参考にされたい。

また、大ヶ谷横穴墓群出土遺物のうち静岡県教育委員会が管理する金属製品と榛原町郷土資料館が所蔵する遺物があることから、ここでは別々に紹介する。

4 静岡県教育委員会が管理する遺物

(1) 概要

静岡県教育委員会が管理する金属製品には、馬具、刀装具、鉾（石突）、農具（U字形鋤先）、刀子がある。

金銅装馬具・鉾の石突がⅠ－1号横穴墓（以下、○号横穴墓については○号墓と省略する）、鋤先がⅣ－1号墓であること以外は、出土した横穴墓を特定できない。

(2) 馬具（図5・6）

ここに紹介する馬具のほかに、第5章で後述するように榛原町郷土資料館が所蔵する遺物がある（大谷2006）。これについても、大ヶ谷横穴墓群出土とあるだけで出土した横穴墓は特定できない。

金銅装馬具と鉄製馬具が存在しており、榛原高校調査時の報告を読むと、Ⅰ－2号墓は鉄製と記載されているため、金銅装馬具はⅠ－1号墓に伴うものと想定できる。

轡 1～7は金銅装十字文透（あるいは透十字文）楕円形鏡板付轡である（註5）。破片になっているため同一個体を見極めるのが困難であり、接合を試みたものの、図化した以上には接合できなかった。榛原高校報告によれば、Ⅰ－1号横穴墓出土の可能性が高い。

鉄製の十字文透の地板の上に鉄地金銅装の十字文透の上板金具を鉾で固定するものである。地板の断面は薄い長方形、上板の断面は台形である。

立間は大型矩形である。鏡板の平面形は横長の楕円形である。銜先環との連結部分の形状は円形である。その銜先環と連結するために横長の長方形が穿たれている。また、金銅装の上板の円形部分は、銜と連結す

るための棒状金具を設置するためか、切り込みが確認できる。十字文透の上部形状は下部に向かって窄まる形状、左右と下部は直線的な形状である。鉾は十字文と縁金具の部分に4箇所打たれており、銜との連結部分の円形部分にも4箇所打たれている。鉾は金銅装（の可能性が高い）の笠形鉾である。銜先環を覆い隠す覆輪は被せられていなかった可能性が高い。TK43型式併行期を前後する時期に位置づけられる可能性が高い（内山1996）。

13は銜あるいは引手、14は引手の引手壺であり、く字形の引手壺である。後述するように榛原町郷土資料館所蔵資料の中に環状鏡板付轡の破片があることから、上述した楕円形鏡板付轡に伴うか環状鏡板付轡に伴うか断定できない。

辻金具・雲珠 鉄地金銅装雲珠（25）と、辻金具か雲珠の脚部（15～24、27～29）がある。

雲珠は半球形鉢（25）である。残存状況が良好ではないため脚数は不明であるが、8脚の可能性が高い。鉢の中央には円孔が穿たれており、宝珠形の飾りが取り付けられていた可能性が高い。その宝珠形の飾り金具の花形座金具の可能性が高い八弁の鉄地金銅装金具（10、註6）がある。

脚部片は、半円方形と剣菱形の2種類がある。前者は別造りの金具が取り付けられるもの（27～29）と、取り付けられていないもの（15～23）の2種類に区分できる。後者は1点（24）である。

27は鉄地金銅装の脚部の板に半円方形平面で円形部が半球形に形作られる金具を載せて鉾で固定するものであり、全国的にみても希有な構造である。29は革帯と固定するための鉾が半円方形の金具に覆い隠されており、革帯を固定した後に半円方形の金具が取り付けられた可能性が高い。28・29はこの半円方形金具である。27～29は雲珠あるいは辻金具の脚部としたものの飾帯金具の可能性も排除できない。

15～23は鉄地金銅装で辻金具あるいは雲珠の半円方形の脚部である可能性が高い。脚の長軸に平行する縦2鉾のものと1鉾のものが確認できる。縦2鉾のものは上述した29の鉾の位置と比較すると、鉾数・位置ともに合致しないことから、27～29とは同一個体ではない可能性が高い。1鉾のものは2鉾のものに比べて若干幅が広く2.6～2.8cmである。2鉾のも

表2 大ヶ谷横穴墓群出土金属製品の種類別数量

横穴墓番号		環頭 大刀	大刀	刀子	鉄鋤	馬具	鑿	鋤先	矛石突
榛原高校	榛原町教委								
Ⅰ－1	②－2	1		5	29	4（一括）			1
Ⅰ－2	②－3		1	6		1（一括）			
Ⅱ－1	③－3								
Ⅲ－1	④－？		1	2	4		1		
Ⅲ－2	④－？			1					
Ⅲ－3	④－？	1	1						
Ⅲ－4	④－？			2					
Ⅳ－1	⑥－1？				1			1	
Ⅵ－1	⑩－？			1					
Ⅵ－3	⑩－？			2					
Ⅵ－6	⑩－？				5				
不 明					3				
合 計		2	3	19	42	5（一括）	1	1	1

※榛原町教委1990より一部改変して引用。なお、合計数量等の修正を行った。

※Ⅲ－1号墓から出土したとされる「鑿」は現状では確認できない。

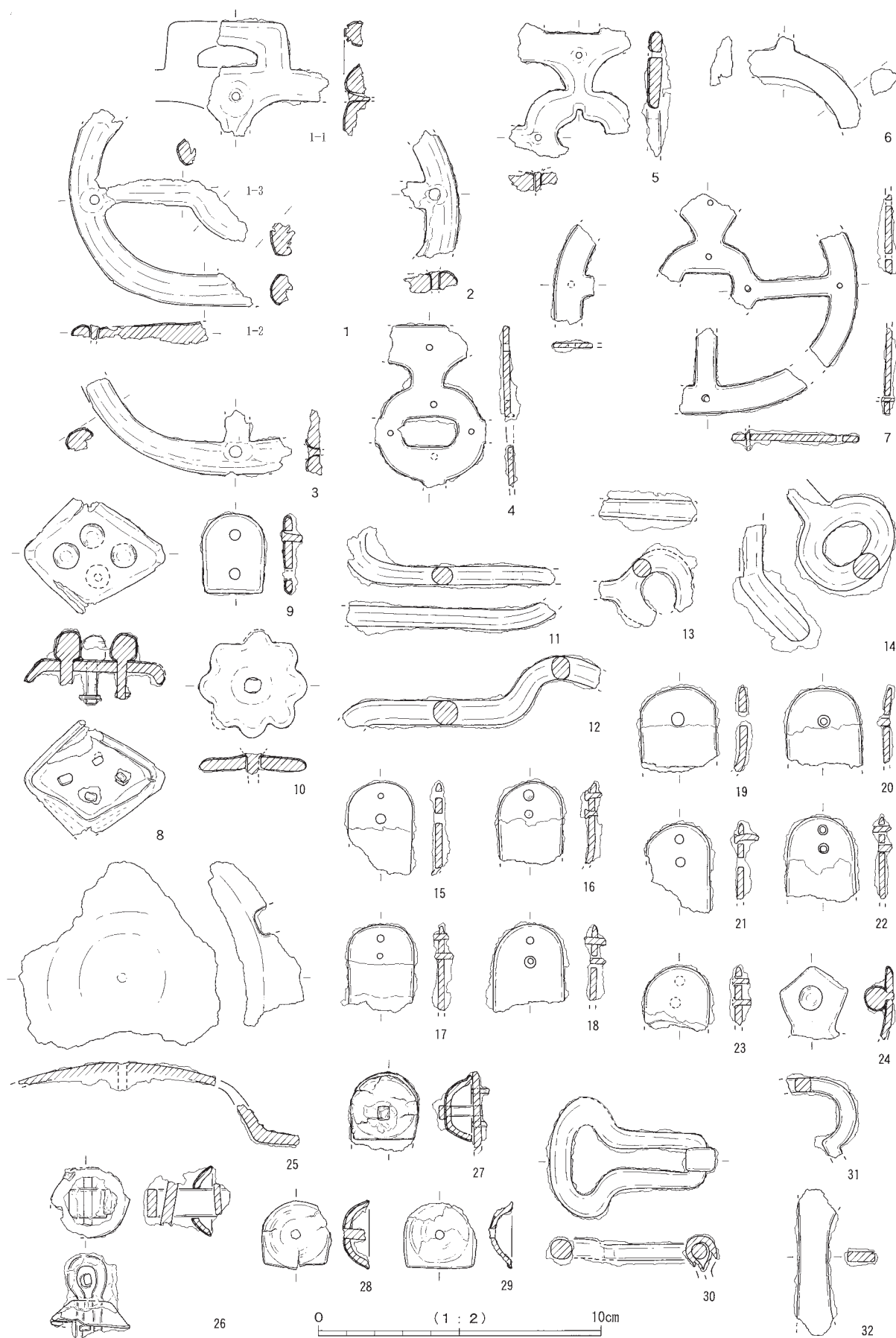


図5 大ヶ谷横穴墓群出土金属製品 1 (静岡県教育委員会管理①)

のは2.2～2.4cmである。上述した25の脚部は幅2.6cm以上であることから、25に伴う脚は1銚のもの（19・20）である可能性が高い。その場合雲珠は、半円形脚半球形銚（1銚系）に位置づけることができる（宮代1996b）。

なお、両者ともに表面あるいは裏面に皮が付着したような痕跡（15～17・19・20・22の銚の下部）が確認できる。16を確認すると銚頭がある側で確認できることから、革帯に脚が固定された後脚の長軸に直交して皮革が巻かれた可能性がある。

24は平面剣菱形の鉄地金銅装の脚である。大きさからみると辻金具の可能性が高い。剣菱形の中央にやや大型の頭部を持つ金銅装銚が打ち込まれている。菱形の脚部を有する馬具にはしおでの座金具も存在するが、銚を打つことから辻金具の可能性が高い。

鞍金具・しおで・鐙・鉸具 鞍金具の可能性のあるもの（32）、しおで（26・30）、鐙の兵庫鎖の可能性が高いもの（11・12・33～36）、しおであるいは鉸具（31）がある。

32は片側が内側に向かって弧を描くものであり、磯金具（の州浜金具）の破片の可能性はあるが、断定できない。鉄製である。

しおで（26）は鉸具の一部と脚金具、座金具が残存している。座金具は半球形で、鉄地金銅装である。鉸具と脚は鉄製である。脚金具は鉸具を巻いて座金具をとおり鞍にはめ込まれるものである。座金具内面と脚部には鞍の磯金具の一部と思われる薄い鉄板が付着している。鉸具は鉄製であること以外形状は不明であるが、鉸具の幅や厚さから考えると、30が同一個体の可能性は低く、31の鉸具が同一個体である可能性が高い。

しおで（30）は鉄製鉸具と鉄製脚金具の一部が残存している。平面形状はきのこ形であり、断面は楕円形から円形である。基部に脚が巻きついている。

鉸具（31）は断面長方形であり、平面形状はきのこ形であった可能性が高い。上述したように26と同一個体の可能性がある。

鐙の吊金具である兵庫鎖（の可能性が高いもの）が6点出土している（11・12、33～36）。兵庫鎖の鉄棒が太いことから大型の兵庫鎖を使用したものと推測でき、兵庫鎖3連であった可能性が高い。

帯金具 帯金具は鉄地金銅装のものが2点確認できる。半円方形で2銚のもの1点（9）と、菱形で4銚のもの1点（8）がある。

菱形のものは四隅に大型の球形頭の銚を打ち込むも

のである。半円方形のものは縦2列に小型の笠形銚を打ち込むものである。

（3）刀装具・銚（石突）（図6）

刀装具 大刀・小刀は、刀幅と茎の数量などから大刀3振、小刀2振以上が確認できる。

大刀（45）は刀身であり、切先はカマス切先に近くふくらが張るもので、刀身は直刀である。残存長約41cm、刀身幅2.5cmである。大刀（47）は刀身～茎の破片であるが、劣化が著しく、本来の形状や大きさは不明である。茎に目釘孔が1孔穿たれている可能性が高い。残存長約46cm、刀身幅3.5cm以上である。関の形状は不明である。大刀（51）は関～茎の破片である。錆化が進行し、関の形状は不明であるが、刀身幅と茎幅を比較すると、両関で、直角関（あるいは撫関、図は直角両関と推定）の可能性が高い。茎は茎尻に向かい幅を狭める。茎尻先端まで残存していないため断定はできないが、図左下部分が抉れたような状態で残存していることから隅抉り尻の可能性はある。

小刀（41・46）は茎の幅から大刀あるいは刀子ではないと想定したものである。41は小刀の茎片と想定するが、目釘と想定するものが笠形である可能性が高いことから、図8の146に示すような鐙金具の可能性も残る。鉄製で目釘が2点確認できる。46は関～茎の破片であり、棟側よりも刃側が抉りの深い直角両関である。茎には木質が遺存しており、木柄であることが判明する。

このほか刀身幅から、刀身片44・49は45と同一個体、刀身片50は51と同一個体の可能性がある。また、刀身～関片43は木柄であることが判明する。

42は平坦な円形の頭部で、棒状部分（軸）の断面は長方形である。棒状部分には直交する木質が確認できる。大刀の目釘の可能性が高いが、両頭金具の可能性も完全には排除できない。

鐙は2点確認でき、いずれも鉄製無窓鐙である。38の外形・内孔ともに倒卵形、37は外形・内孔ともに楕円形に近い経常であった可能性が高い。39はU字形の金具であるが、本来は倒卵形（あるいは楕円形）の金具で、大きさからみると鞘あるいは柄の貴金具である可能性が高い。象嵌は確認できない。

銚（石突） 1点（40）確認できる。I-1号墓出土であることが特定できる。

石突は、先端部分が中実で、それ以外は木柄を差し込むために袋状である。先端部の断面は、隅丸方形、

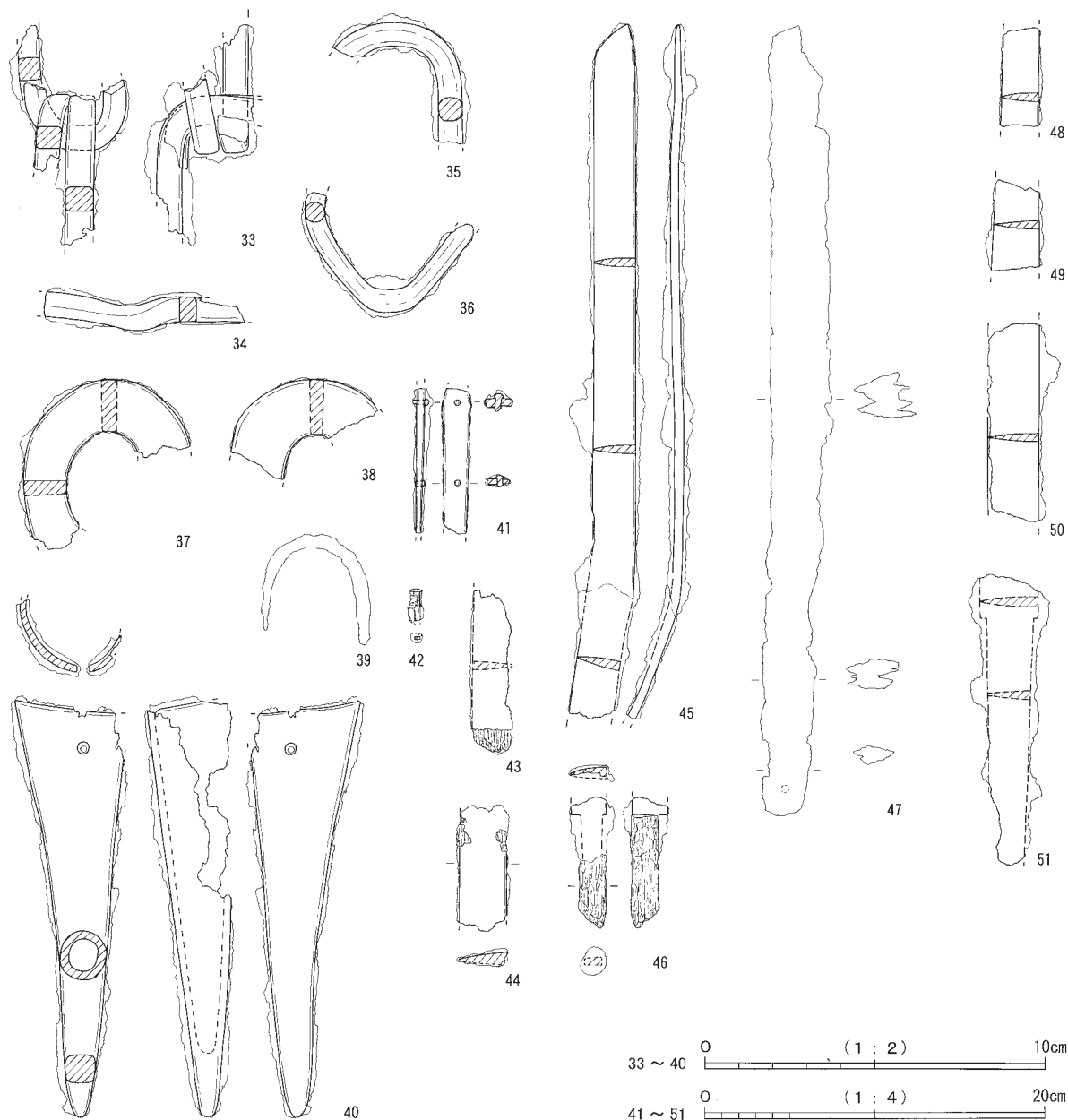


図6 大ヶ谷横穴墓群出土金属製品2（静岡県教育委員会管理②）

袋部は円形である。袋部端部付近に目釘孔が開けられている。袋部の鉄板の合わせ目は確認できないことから、袋部の合わせ目から90度の位置に穿孔された可能性が高い。全長12cm、袋部直径3.5cm前後である。

（4）鉄鏃（図7）

鉄鏃は49片確認できるが、現状では横穴墓を特定できないため一括して報告する。I-1号墓が29点と多いことから大部分が当横穴墓に伴う遺物である可能性が高い。

鏃身が残る個体のうち54のみ平根式鉄鏃であり、それ以外（52・53、55～61）は尖根式鉄鏃である。また、

平根鏃の54が台形関である一方、尖根鏃の52・53や頸部が長く尖根鏃である可能性が高い70・71は刺関であることから判断して、刺関のものは尖根式である可能性が高く、さらに頸部から茎の破片の多くは尖根式鉄鏃である可能性が高い。

平根式鉄鏃 平根鏃の54は腸扶柳葉式であり、茎関は台形関である。この鉄鏃形式は大ヶ谷横穴墓群が築造される遠江Ⅲ期中葉（TK43併行期）以降には減少する鏃形式である（大谷2003）が、大ヶ谷横穴墓群から直線で約9km南西にある、牧之原市（旧相良町）小堤山横穴墓群では同形式の柳葉式鉄鏃が多数出土している（大谷2001）ことに注目する必要がある。想定域

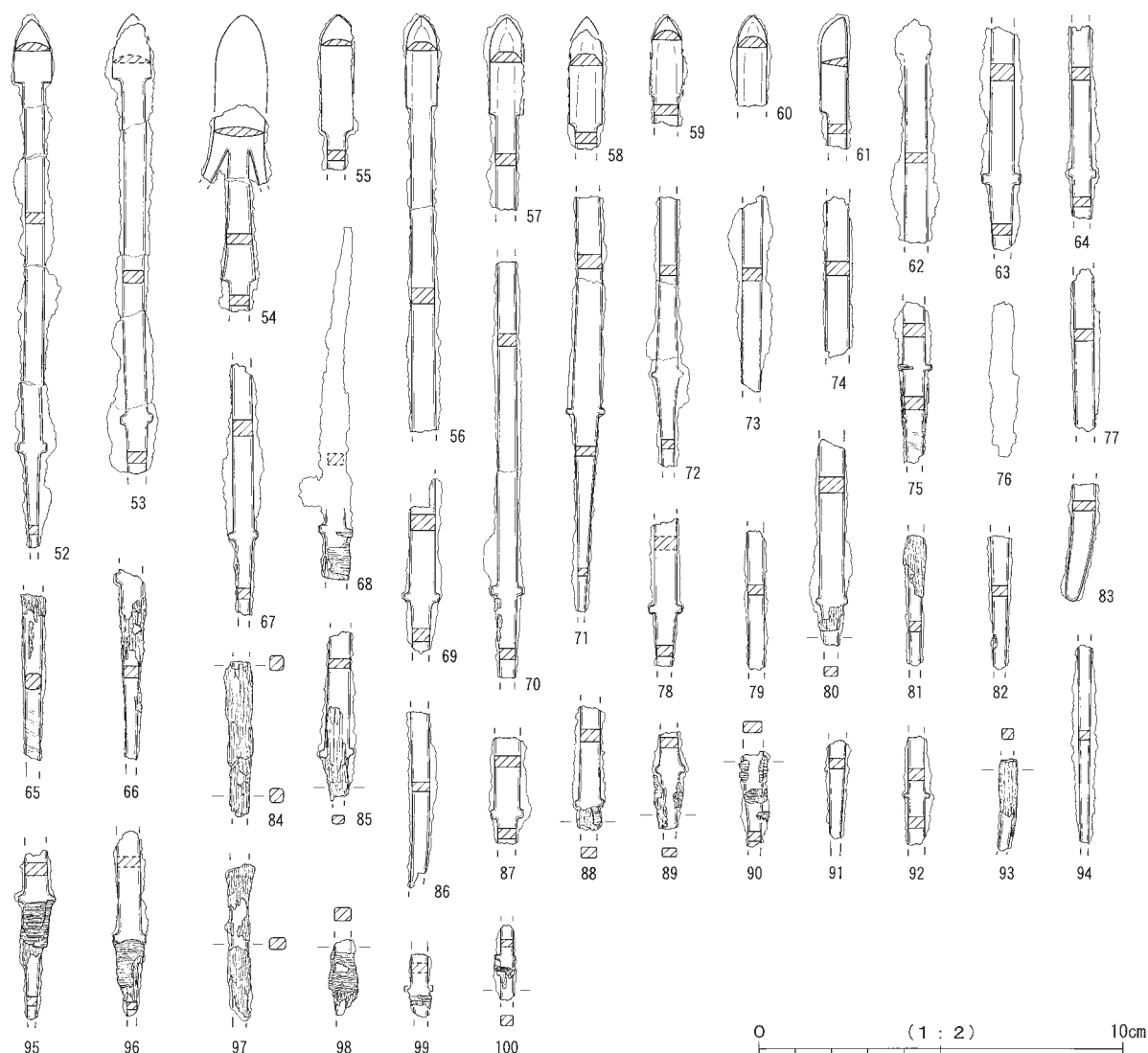


図7 大ヶ谷横穴墓群出土金属製品3（静岡県教育委員会管理③）

を出ないが、榛原郡内での首長間の連携により、この平根柳葉式鉄鏃が象徴的に副葬された可能性も考慮しておく必要がある。

尖根式鉄鏃 尖根鏃の52・53は三角形式で、鏃身は片丸造である。55～60は柳葉式で、55が片丸造、56～60が片鑄造である。61は片刃箭式で、直角関である。時期を特定することは難しいが、いずれも古墳時代後期後半（遠江Ⅲ期中葉～後葉）に位置づけられる可能性が高い。

茎関が残るものは刺関である。63のようにしっかりとした刺関があれば、92のように非常に細いものもあることから、時期差のある鉄鏃が含まれている可能性が高く、複数の横穴墓から出土したものが混在している可能性が高い。

（5）農工具・刀子（図8）

鍬先 鍬先U字形鍬（鋤）先が1点出土している。IV－1号墓出土である。U字形に鍛造したもので、木柄への装着のため内側にはV字形の溝があり、断面はY字形である。

古墳時代後期以降において静岡県内の古墳・横穴墓でU字形鍬先が出土している古墳は非常に少なく（武田2003）、東海地方に範囲を広げても古墳時代後期以降鍬先が副葬された古墳は非常に少ない（大谷・西澤編2001）。静岡県内では富士市中原4号墳や静岡市泉ヶ谷稲荷神社3号墳、浜松市半田山古墳群（5基）、瓦屋西C9号墳、下滝G－9区2号墳から出土している（武田2003）が、横穴墓からの出土は大ヶ谷IV－1号墓に限られている（静岡県考古学会2001）。したがって、古墳時代後期以降副葬されることが少ない農具が副葬さ

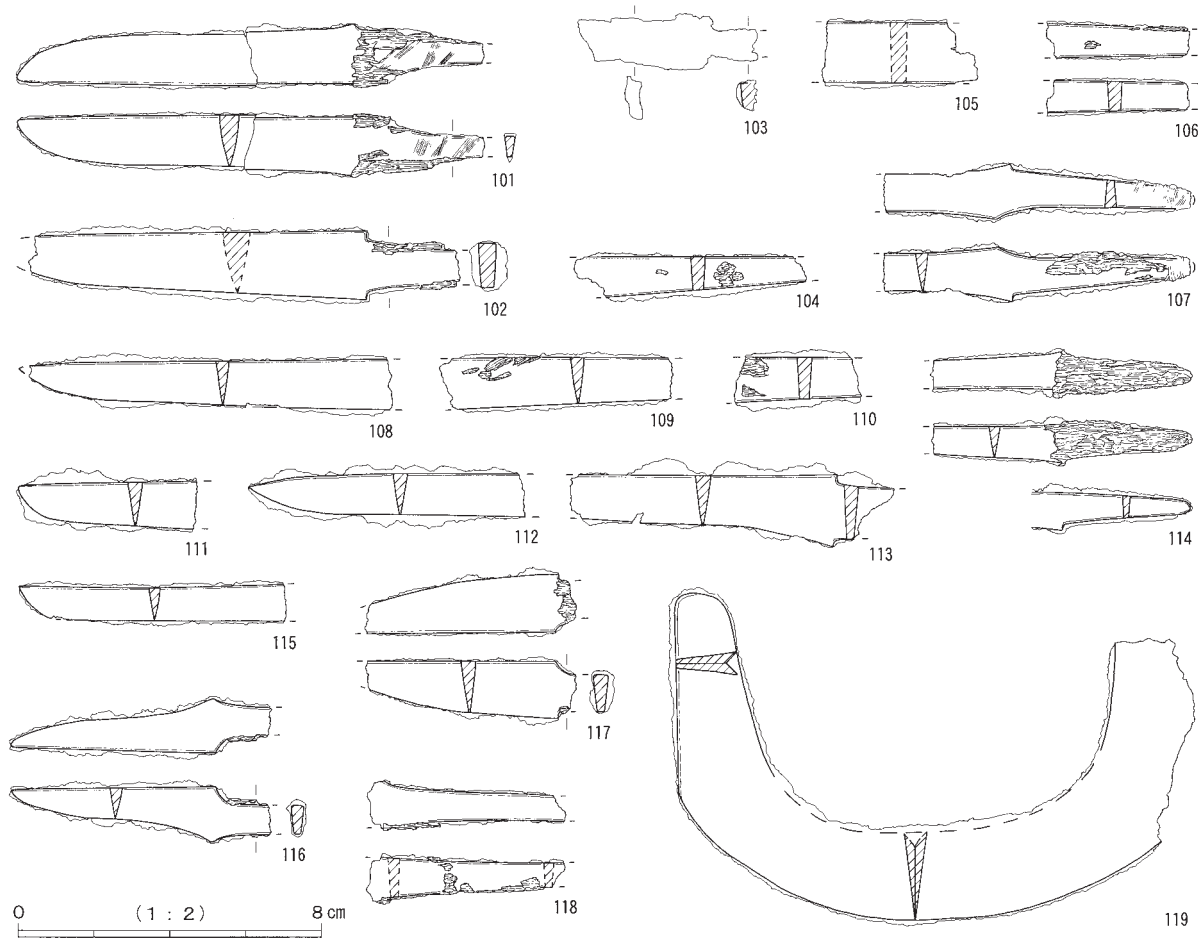


図8 大ヶ谷横穴墓群出土金属製品4（静岡県教育委員会管理④）

れた古墳・横穴墓としての性格を明らかにする必要がある。

刀子 総数では「19点」出土している（榛原町教委1990）が、現状で18片確認できる。今回小刀として紹介したものの中に「刀子」とされたものが含まれる可能性が高い。個体数としては、茎数や切先から判断して9個体以上存在している。なお、いずれも出土した横穴墓の番号は特定できない。

刀子は、両関で直角関のもの（101・102・113）、片関で直角関のもの（114）、両関で刃側が直角関、棟側が撫関のもの（107・117）、両関で撫関のもの（116）がある。大きさはやや大型のもの（101・102・108など）と小型のもの（114・116）がある。

茎まで残存するものは茎に木質が付着しており、いずれも木柄であったことが判明する。刀身に鞘の痕跡が残存するものは少なく、109に木質と樹皮巻の痕跡が確認できる程度である。109は木鞘を樹皮で巻いていた可能性が高い。

5 榛原町郷土資料館が所蔵する資料

（1）概要

榛原町郷土資料館（2005年）で確認したのは金属製品では馬具のみである。馬具（図8）には、轡、半球形金具、双脚半円形金具、辻金具・雲珠破片、鞍金具、鎧金具が存在した。本来、榛原高校で保管されていたものと想定されるが、封入された紙には横穴墓番号はI-1号墓出土とある。したがって、以下に報告する馬具はI-1号墓出土である可能性が高い。

なお、金属製品以外の須恵器などの遺物については、筆者が実見した当時は榛原町郷土資料館が所蔵しており、現在はその資料を引き継いだ牧之原市教育委員会が所蔵している。

（2）馬具（図9）

轡 鉄製環状鏡板付轡の破片は120と121で同一個体の鏡板の可能性が高い。120の上部に立間の痕跡が確認できることから、大型矩形立間環状鏡板付轡の可能性が高い。鉄製馬具であることからI-2号墓に伴う

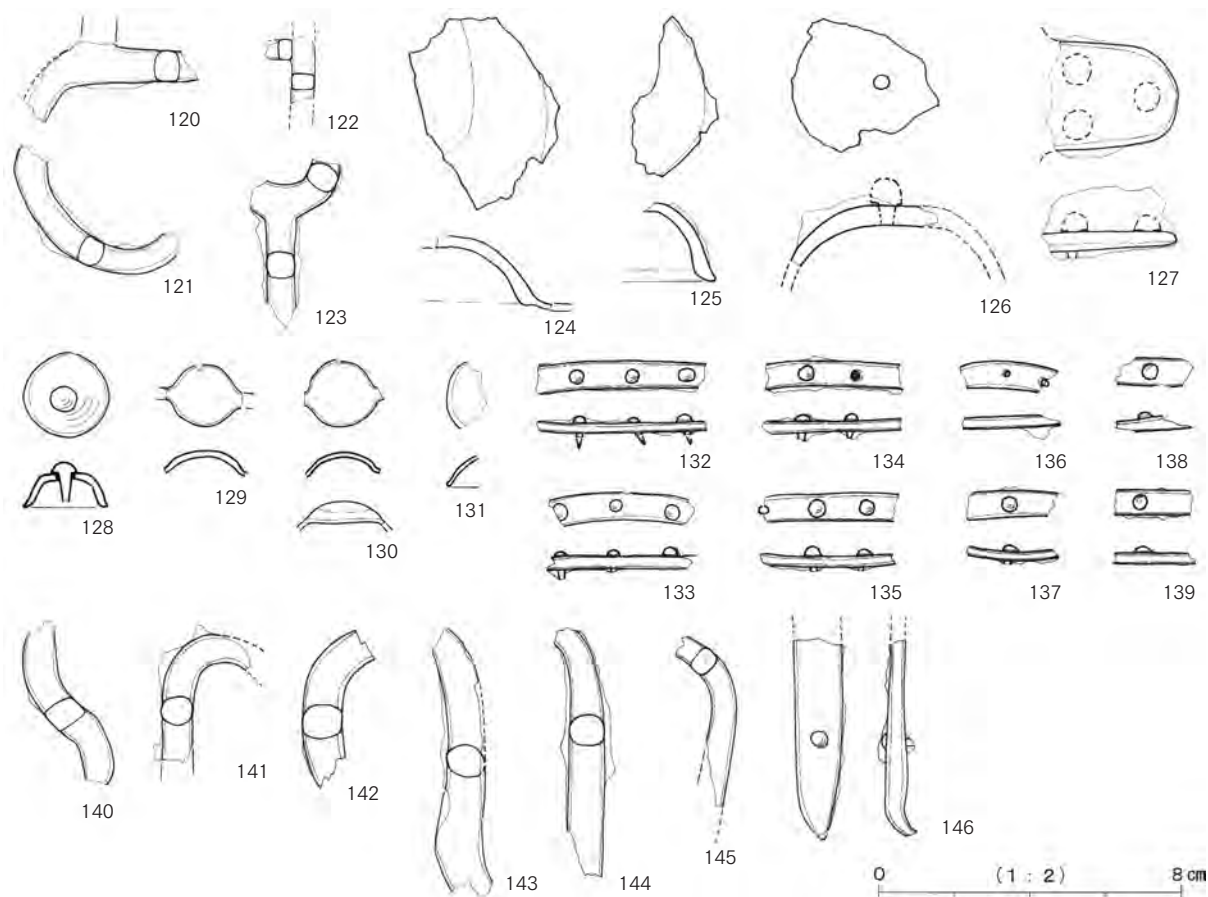


図9 大ヶ谷横穴墓群出土金属製品5（榛原町郷土資料館蔵①，大谷2006より改変して引用）

可能性があるが、断定はできない。

123は銜あるいは引手の破片である。ここに報告した環状鏡板付轡か、前章で報告した金銅装十字文透鏡板付轡に伴う可能性が高い。どちらに伴うか断定はできない。

このほか上述した十字文楕円形鏡板付轡の外縁と十字文の接合部の可能性のある鉄製破片122がある。この想定が正しければ、122は地板金具である。

辻金具・雲珠 124～127は半球形鉢をもつ辻金具・雲珠の半球部と脚部破片である。大きさから124・126は雲珠、126も雲珠の可能性が高い。127は雲珠あるいは辻金具の脚部である。いずれも鉄地金銅装雲珠である。126の鉢部中央には円孔がけられており、宝珠形銕と花形の座金具が取り付けられていた可能性がある。静岡県教育委員会が管理する雲珠に同様部位の破片が確認できることから、雲珠は最低2点存在した可能性が高い。

127は錆によって観察し難いが、やや扁平な半円形脚で、3銕を打つものである可能性が高い。

半球形金具・双脚半球形金具 半球形金具（128）は

中央に金銅装の円形頭の笠銕を打ち込むものである。銕の断面は円形である。上述した図4の27～29のように半円方形の金具であった可能性も残る。その場合は雲珠・辻金具の脚部の可能性がある。

半球形金具は掛川市長福寺1号墳、磐田市甕塚古墳などで出土している（東海古墳文化研究会2006参照）。この2古墳をみるとその他の副葬品も豊富であり、石室規模も大きいことから地域の首長墓から出土しているといえる。当横穴墓出土資料も同様の位置づけができる可能性が高い。

双脚半球形金具は金銅装で低平な半球の左右に細い脚が取り付けられるものである。静岡県内では、磐田市明ヶ島15号墳、浜松市蛭子森古墳等で出土している（東海古墳文化研究会2006参照）。

なお、両金具ともに用途は特定されていないが、半球形金具は一種の辻金具、双脚半球形金具は鞍の飾金具の可能性が高い。

鞍金具 鞍金具は縁金具のみの出土である。保存処理されていない錆が進行した状態での観察では、金銅装は確認できず、縁金具・銕ともに鉄製であると推測

する。今後の保存処理及び分析が俟たれる。

縁金具は8片確認できる。幅1 cmほどの金具に少鋳を1.2～1.5 cmほどの間隔で打ち込むものである。鋳は円形の笠鋳である。

上述した鉄製金具(図5-32)が州浜金具でこれらの鉄製の縁金具と同一の鞍に伴うと仮定することが許されるのであれば、この縁金具を有する鞍は、宮代栄一氏による「木製鞍(しおで以外に金属をほとんど用いない鞍)の系列」のうち「覆輪を伴わず、磯と州浜形を別造りにする系列(幅の細い縁金具を用いる)」(宮代1996b)に位置づけることができる可能性が高い。

鐙金具 鐙の吊金具である兵庫鎖6片(140～145)と鐙の吊金具片1点(146)がある。

兵庫鎖は細片に碎けており、接合関係は不明である。断面円形あるいは楕円形である。

吊金具は、逆U字形の吊金具で、木製鐙を挟み込んで鋳で留める本体部分が出土している。先端部は木製鐙に固定できるよう鉤(爪)形に折り曲げられている。鋳は鉄製の笠鋳1鋳が確認でき、ある程度の間隔をおいて鋳留めしたものである。兵庫鎖との連結部分は確認できない。

第4章で紹介した兵庫鎖を含め、鐙は大型の兵庫鎖で吊り上げられる木製壺鐙で、現状の破片数からみると1組の鐙である可能性が高い。

(2) 三累環頭大刀(図10)

今回の実測対象としていないが、川江秀孝氏、野垣好史氏が図を示しており、今回は川江秀孝氏の図(川江1992)を掲載した(図10)。I-1号墓出土である。

金銅装である。三累環と茎を一体造りするもので、三累の中央に蕾文が配される三累環頭大刀の中でも珍しいものである。朝鮮半島製、日本列島製の評価の分

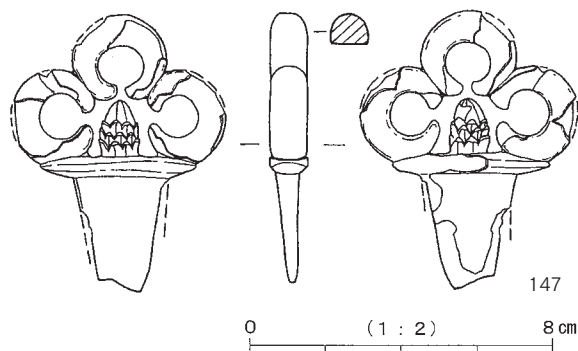


図10 大ヶ谷横穴墓群出土金属製品6
(榛原町郷土資料館蔵②, 川江1992より引用)

かれる資料である。TK43型式併行期に位置づけられている(野垣2002)。

6 まとめ

小論では、静岡県教育委員会が管理する金属製品と榛原町郷土資料館が所蔵した大ヶ谷横穴墓群出土の金属製品について紹介した。

金銅装馬具は十字文透楕円形鏡板付轡であり、県内でも確認されている十字文透心葉形鏡板付轡との関係が注目される。また、半円方形の脚部に半球形鉢を持つ半円方形の金具を取り付ける辻金具・雲珠など全国的にみても特殊な構造を有する馬具であり、全国的な比較研究を行う必要がある。さらに、これらの金銅装馬具が、金銅装馬具が出土したとされるI-1号墓に伴うものだとすれば、少なくとも数種類の雲珠・辻金具が存在した可能性があり、その組み合わせ関係も明らかにしていく必要がある。

また、大ヶ谷横穴墓群内で最大規模とされるI-1号墓から装飾付大刀・金銅装馬具・鉾が出土していることは、I-1号墓が地域の中でも階層的に上位階層であり、当横穴墓群はI-1号墓を中心として構成された可能性を考えておいてよい。金銅装馬具が出土した仁田山ノ崎古墳とは若干の時期差があると想定されるため直接の比較は難しいが、地域内で古墳と横穴墓のどちらが上位にあるのか興味深い資料である。

以上、ここに紹介した金属製品や、これまでに報告されている土器や玉類などの資料の分析や、これらの出土品と横穴墓群の関係から大ヶ谷横穴墓群の性格の分析、横穴墓と横穴式石室の関係分析など多岐にわたる課題に対して研究が活発に行われることを祈念して紹介を終えたい。

【謝辞】

本稿を執筆するに当たり、足立順司氏、大森信宏氏、松下善和氏、丸杉俊一郎氏、榛原町郷土資料館(当時)、牧之原市教育委員会に御指導、御高配をいただいた。明記して深謝します。

註

- 1 馬具と装飾付大刀については『東海の馬具と飾大刀』(東海古墳文化研究会2006)、鉄鏃については『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』10号で集成の報告している。
- 2 大ヶ谷横穴墓群は牧之原市指定文化財(史跡)に指定されているが、指定時の横穴墓の基数は42基である。

3 足立順司氏が「杏葉」として報告した個体（足立2011－第51図6）は、足立氏の図面と今回報告する出土遺物を比較すると轡（小論の遺物番号1，図4）であると特定でき、杏葉ではなく十字文透楕円形鏡板付轡である可能性が高い。また、今回確認した遺物の中には鉾は確認できないため、氏が「鉾」として報告した遺物（足立2011－第51図11）は、石突（小論の40，図6）の可能性が高い。

4 三累環頭大刀は、本来Ⅰ－1号墓から出土しているが、詳細分布報告（榛原町教委1990）で、この横穴墓が②（2－2号墓とされたことから、それが影響してか「Ⅰ－2号墓」から三累環頭大刀が出土したように記載される場合がある。こうした混乱を避けるため小論では、古くから使用されている榛原高校調査段階の横穴墓番号で報告する。

5 現存する破片からは楕円形平面である可能性が高いが、金銅装の上板の残存状況が良好ではないことから、鏡板の下部が外側に若干突起する心葉形であった可能性もわずかに残る。また、鉄製地板・金銅装上板ともに十字文透であり、地板と上板の間に金銅板を入れたような痕跡は確認できない。

十字文透心葉形鏡板付轡は、松尾充晶氏により14例が報告されている（松尾1999）。氏の集成後静岡県内で磐田市合代島所在古墳出土例（未報告）が確認されたほか、鳥取県岩美町小畑3号墳（鳥取県教育文化財団2002）でも出土しており、20例弱が知られている。一方、十字文透楕円形鏡板付轡の類例はほとんどないと思われる。

松尾氏の研究（松尾1999）を参考にすると、十字文透心葉形鏡板付轡の場合は、金銅装の上板だけでなく地板も心葉形に作るようであるが、大ヶ谷Ⅰ-1号墓出土例は、地板は楕円形の可能性が高い。また、心葉形は間隔が小型矩形であることが多いようであるが、大ヶ谷例は大型矩形であること、銜と鏡板の連結部分の円形（方形）金具への鉾の打ち方が、心葉形は四角形の隅角に打つのに対し、大ヶ谷例は十字文透かしとの交点に打つ。これらの差異から、大ヶ谷例は心葉形ではなく楕円形鏡板付轡である可能性が高い。なお、この想定が正しければ、松尾氏による十字文透心葉形鏡板付轡の分析（松尾1999）による「Ⅰ類」に近く、銜を覆う覆輪金具を伴わないことから、Ⅰ類よりも古い可能性が高い。

なお、掛川市長福寺1号墳からは十字文心葉形鏡板付轡とともに半球形金具、2鉾の半円方形脚が出土しており（田村・鈴木ほか2001）、鏡板の形状は異なるものの、その関連例が注目できる。

6 なお、詳細分布調査報告（榛原町教委1990）の写真をみると、飾鉾の頭部が残存していたことがわかるが錆化の進行により頭部が失われた可能性が高い。

引用・参考文献

- 足立順司 2011 「まとめ」『七社神社遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 内山敏行 1996 「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
- 大谷宏治 2001 「小堤山横穴群出土金属製品」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』 9号
- 大谷宏治 2003 「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鏃の変遷とその意義」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』 10号 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2006 「馬具 東遠江」『東海の馬具と飾大刀』
- 大谷宏治編 2012 『森町円田丘陵の横穴墓群』静岡県埋蔵文化財センター
- 大谷宏治・西澤正晴編 2001 「東海の後期古墳データベース」『東海の後期古墳を考える』 東海考古学フォーラム三河大会実行委員会
- 川江秀孝 1992 「飾大刀」『静岡県史』資料編3 静岡県静岡県考古学会 2001 『東海の横穴墓』 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003 『研究紀要』 10号
- 鈴木敏則 2004 「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』浜松市教育委員会
- 武田寛生 2003 「東海地域における後期古墳出土農具について」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』 10号 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 田村隆太郎・鈴木一有ほか 2001 「遠江長福寺1号墳の研究」『静岡県考古学研究』 33号 静岡県考古学会
- 東海古墳文化研究会 2006 『東海の馬具と飾大刀』
- 鳥取県教育文化財団 2002 『小畑古墳群』
- 野垣好史 2002 「三累環頭大刀の編年」『物質文化』 74号物質文化研究会
- 榛原高等学校地歴クラブ
『大ヶ谷横穴古墳概要』
（榛原町史編纂委1985に再録）
- 榛原町史編纂委員会 1985
『静岡県榛原町史』上巻 静岡県榛原町
- 榛原町教育委員会 1990
『大ヶ谷横穴群詳細分布調査報告書』
- 松尾充晶 1999 「上塩冶築山古墳出土馬具の時期と系譜」『上塩冶築山古墳の研究』 島根県古代文化センター
- 宮代栄一 1996a 「倭人たちの馬装―面繫を中心に」『黄金に魅せられた倭人たち』 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
- 宮代栄一 1996b 「鞍金具と雲珠・辻金具の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館